

24 寛解後空腸穿孔で再発した小腸原発 T 細胞性リンパ腫の 1 例

上原 智仁・中塚 英樹・島田 哲也

森岡 伸浩・宮下 薫

独立行政法人労働者健康福祉機構
燕芳災病院外科

患者は 64 歳の男性. 2008 年 11 月に下血を主訴に来院. 腹部 CT で小腸からの出血と考え, 開腹手術を行った. 空腸に白色結節を認め, 空腸部分切除を施行. 病理所見で CD3 陽性, CD20 陰性の小腸原発 T 細胞性悪性リンパ腫であった. 術後, 内科で CHOP 療法を施行し寛解となった. その後外来でフォローアップされていたが, 2010 年 2 月に腹痛を主訴に来院. 腹部 CT で free air と腹水を認め, 消化管穿孔の診断で緊急手術となった. 上部空腸に白色結節と穿孔を認め, 空腸部分切除を施行した. 病理所見で T 細胞性悪性リンパ腫であり, 再発と考えられた. 術後 20 日目に切除部位よりさらに肛門側の小腸に再穿孔をきたした. 再度小腸部分切除を施行したが, 術後多臓器不全にて死亡した. 小腸原発の T 細胞性リンパ腫は症例が少なく, B 細胞性リンパ腫に比較して予後は不良である. 今回, 寛解後に空腸穿孔で再発した小腸原発の T 細胞性リンパ腫の 1 例を経験したので, 文献学的考察を加えて報告する.

25 切除不能肝内胆管癌に対する化学療法

宗岡 克樹・白井 良夫*・佐々木正貴

若井 俊文*・坂田 純*・神田 循吉**

若林 広行**・畠山 勝義*

新潟医療センター病院外科

新潟大学大学院消化器・一般
外科学分野*

新潟薬科大学薬学部臨床薬剤
治療学研究室**

【目的】切除不能肝内胆管癌の化学療法の経験について報告する.

【方法】2005 年 2 月以後に化学療法を施行した切除不能または切除後再発の胆道癌 50 症例中, 肝内胆管癌 7 例を対象とした. 当科における 1 次

治療の選択は 2005 年 2 月からは GEM/CPT-11 であり, 2008 年 2 月からは GEM/S-1 とした.

【結果】全症例の治療期間は 4 ~ 16 か月 (中央値 11 か月) であった. PR は 3 例, SD は 2 例, PD は 2 例であり, 全体の奏効率は 42 % であった. GS 療法後治癒度 B 手術を施行した症例を提示する. CT 上肝外側区域に径 6 cm の辺縁不正な腫瘍を認め, 横隔膜への直接浸潤および傍噴門および腹腔動脈根部, 肝門部リンパ節腫大を認め, 根治術不能と判断し化学療法を施行した. GS 療法後 7 ヶ月後に開腹手術を施行した. 腹膜転移を認めたが, 術中迅速病理検査で癌細胞はなく, 肝左葉切除, 肝外胆管切除を含むリンパ節郭清, および右肝管空腸吻合術を施行した. 化学療法の効果判定は Grade 2 であった. 術後 6 カ月後の現在無再発生存中である.

【結論】新しい GEM 併用療法の出現は, 切除不能肝内胆管癌に対する化学療法と外科手術の組み合わせで, 長期生存成績の改善につながる可能性がある.

26 肝細胞癌 (HCC) に対するアイエーコール (DDP-H) 肝動注の効果と投与量規定因子

須田 剛士・大崎 暁彦・川合 弘一*

土屋 淳紀・上村 顕也・矢野 雅彦

田村 康・高村 昌昭・五十嵐正人

山際 訓・大越 章吾・野本 実

青柳 豊

新潟大学大学院医歯学総合研究科

消化器内科学分野

新潟大学医歯学総合病院検査部*

【目的】HCC に対する DDP-H 肝動注の効果に基づき, 投与量を規定する因子の同定を試みる.

【方法】対象は DDP-H 単独投与がなされた HCC 65 結節である. CT 画像を基に結節の濃染部面積 (A) を算出し, A の縮小率と各種パラメータとの関係を統計学的に検討した.

【成績】DDP-H の治療効果は, 治療後に A が 8 % 以上増大した耐性群 40 結節と, 8 % 以上縮小した縮小群 23 結節の 2 群に大別された. 縮小群